



4

2024

April

No. 534

World Conference of Religions for Peace Japan



こころの扉—「願いと祈り」熊野隆規	2
第2回東京平和円卓会議を振り返って 戸松義晴理事長	3
平和大学講座	4~5
第47回理事会	6
トルコ・シリア大地震支援プロジェクト報告	7
アジア諸宗教青年ピースキャンプ2023	7
WCRP国際委員会 新事務総長・副事務総長就任	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



「願いと祈り」

WCRP日本委員
理事 立正佼成会理事長

熊野隆規



昨年12月より、立正佼成会の理事長を仰せつかりました熊野隆規と申します。宗教界、また各界の皆様からのご指導を受け賜りますようお願いを申し上げます。

昨年末、また年始よりご挨拶のため、先生方のもとにお邪魔を致しました。2月の初旬には、伊勢の神宮を参拝させて頂くことがございました。ありがたくも齊藤少宮司さまにお迎えを頂き、これまで数々の役職にお就きになってこられたご経験や、神宮の歴史にまつわるお話、また、この「こころの扉」にも寄稿なさったことなども

伺いました。

ご面談頂いた後、広報室次長の音羽様のご案内で、御垣内参拝や境内のご説明に預かりました。その時、気づいたことがあります。神宮の境内には、案内の看板や解説文、キャプションのようなものがほぼ必要最低限だったということです。神宮特有の雰囲気と言いますか、余計な説明を施さない独特で凛としたスタイルを感じました。キャプションがない分、音羽様の解説に一層、熱と力が入りました。しかし、その解説も諸説ある中の一

つというお話で、無限に広がる神話の世界を垣間見ることができました。

また、内宮正殿では、個人的なお願ひ事は「なし」だそうですので、常に国民の幸せと安寧を支え続けてくださっていることへの、感謝と御礼の参拝をさせて頂きました。

以前、弊会の機関誌でご執筆頂いたことがある随筆家の若松英輔先生の言によりますと、

あるときまで、「祈る」と「願う」とことをほとんど区別していなかった。できなかった、といったほうがよいのかもしれない。さらにいえば、「祈り」の時間を「願う」で埋め尽くしてきたようにさえ思われる。

願うとき私たちは、人間を超えた存在にむかって、どうにかして自分の思いを届けようとする。——中略——願うとき人は、神仏の「声」にも気が付きにくい。ひたすら自分と話しているからである。

祈るとは、願いを鎮め、彼方からの声に耳をかたむけること、無音の言葉を聞くことではないだろうか。

若松英輔『ひとりだと感じたときあなたは探していた言葉に出会う』

私も祈ることと願うことが混在して、神仏を惑わしてきたように思います。そして、残念ながら仏教は案外、お相手に伝えようと、やりとりが言葉でいっぱいになります。神道の世界は静寂と無言。敢えて語り過ぎないところが、深淵なる祭りの世界と拝しました。WCRPを通じて、さまざまな宗教の持ち味を存分に味わわせて頂けることが、なによりの功德であります。

合掌

第2回東京平和円卓会議を振り返って

戸松義晴理事長

2月に開催された第2回東京平和円卓会議について、成果と課題などをWCRP日本委員会の戸松義晴理事長に聞いた。

日本、WCRPだからこそ

G7メンバー国の中で、このような会議を開催することができる国や団体は多くないと思う。開催地が日本であったこと、主催が特定の宗教・宗派に偏ることのない寛容性を持ち合わせているWCRPだからこそ、この会議を2回にわたって開催することができた。その後の世界の動向をみると、ローマ教皇をはじめとしたリーダーたちから交渉へ向けたメッセージが発信され始めている。WCRPは、この世界の平和へ向けた大きな動きの一翼を担っているとの自負を持つべきだし、さらにリーダーシップ



戸松義晴理事長

を発揮していきたいと思う。
私は常々、「思いをかたちにする」ことを信条としている。2回

目となるこの会議では一足飛びにはいかなくとも、停戦に向けた何らかの具体的な行動に結びつけられないものかと臨んだ。会議の冒頭での厳しい参加者の発言から、紛争当事者のおかれた厳しい現状を思い知るところからのスタートとなったが、「和解」という旗を掲げ、最終日に前回より踏み込んだ声明文がまとめられたことを第一の成果とした。

人と人との交流こそ

今回の会議には、前回に引き続きでの参加者も少なくなかった。公式の会議場で決められたプログラムに沿って交流するだけでなく、人と人、Face to Faceで会話を交わし関係を結ぶことができたと思う。中間日に参加者は、日枝神社や増上寺を参拝し、大本東京本部を訪ね、抹茶や能の体験をすることができた。日本の芸能や文化も宗教と深い関係があることを体感していただくとともに交流が促進されたと思う。このような交流の深まりを通して、今後の行動に結びつくものと期待したい。国会議員との対話で、ある参加者は「この問題は宗教の問題ではない。政治の問題だ」と述べた。また、パレスチナの代表者は「国連パレスチナ難民救済事業機関（U

NRWA）への支援を再開してほしい」と心から訴えた。国会議員に対し各国の宗教者代表者が直接意見を述べる貴重な機会となった。

実践と再会と総括

今後は、声明文に示された「確認・呼びかけ・行動」をどのように実践するのかということが最大の課題となる。それは、ウクライナとロシア、パレスチナとイスラエルなどの紛争当事国とその関係国・関係者が模索し実践することに期待したい。過去の2回の会議を通して培った、お互いの経験の共有や共感、芽生え始めた信頼関係のもとで、それぞれの地域で実践し、次回の会合で再会し総括することが重要になると思う。また、広報の視点からは、会議の性質上から考慮せざるを得ない公開と制限のバランスのとり方については検討の余地ありとも感じた。

※

この会議が開催できたのは、WCRPを支えてくださっている賛助会員の皆さまをはじめ、多くの関係者のおかげさまで。また、開催にあたり実務を担っていただいた事務局をはじめ多くのスタッフの皆さまに感謝申し上げ、振り返りいたします。

平和大学講座

『諸宗教における人間性の教育を語る―他者の痛みへの共感を育むために』をテーマに、平和大学講座が3月14日、浄土宗宗務庁（京都市）でオンラインを併用して開催された。約80人が参加・視聴した。

今回は、他者の痛みへの共感力の育成に焦点をあて、宗教的ヒューマニズムの持つ可能性や展望について学者・諸宗教者が意見を述べた。

戸松義晴理事長（浄土宗総合研究所副所長・浄土宗心光寺住職）の開会あいさつのもと、清泉女子大学の岡野治子名誉教授が『キリストの平和Pax Christi』非暴力の平和とメッセージのように日本社会に伝え



基調発題に立った岡野治子氏

られるか？」と題して基調発題に立った。

岡野氏はまず、旧約聖書をもとにイスラエルの平和観について触れ、「旧約聖書には『神は、最も貧弱であったゆえに、民イスラエルを選んだ』とあり、それは、神の正義とは弱い人に寄り添うということ」と述べた。そして、この神の言葉を、旧約聖書を聖典とするユダヤ教徒は、パレスチナのガザ地区で行っているイスラエル軍による戦闘行為について、どのように感じているのだろうかと憂えた。

キリスト教の平和観としては、「平和はもともと存在するものではなく、また神によって与えられるものでもない。平和は一人ひとりがつくるものという認識がある」と語った。一方で、「強者の論理」といわれる勝者が敗者の権利をはく奪することが正戦であるという論理が伝統化していたローマ帝国が、4世紀にキリスト教を国教化したことにより、ローマ法による正戦論がキリスト教会でも正当化してしまつたと指摘。その後、キリスト教会が神の意思、同胞の解放という大義名分を掲げ、十字軍遠征による異教徒や異端に対する戦争、暴力の容認を行い、それが植民地主義などにつながっていったと述べた。

こうした歴史を踏まえ、カトリック教会

が2000年に、第二バチカン公会議（1962～1965年）を受けて『記憶と和解 教会と過去の種々の過失』を公表したことに言及。教皇ヨハネ・パウロ二世（当時）が「教会は常にその懐に罪人を抱えているために、キリストの体としての不変の聖性と浄化を不断に必要とし、休むことなく、悔い改めと刷新の努力をしなければならぬ」として、平和をつくるための三つの努力、①和解への第一歩・赦し、赦されるための「心の用意」②過去の出来事への「責任」は免除されない③記憶の浄化：「記憶は新しい未来を開く力を持つ」を掲げたことは、カトリック教会にとって画期的な出来事だったと語った。

そして、2000年にドイツがナチス・ドイツの犯した非人道的行為に対し、『過去の克服』として強制労働補償の「記憶・責任・未来」財団を設立し、過去を見つめて責任を受け継いでいることを紹介。そのうえで、記憶は単に「覚えておく」ということではなく、「未来に向けて重要要素を心に刻むこと」と述べた。さらに「すべてを水に流す」という文化が存在する日本においても、「広島・長崎の原爆、福島での原発事故など未曾有の喪失体験や、過去の植民地主義の反省・記憶を、アジアの近隣諸国と



会場の様子

どのように生かしていくかが重要になって
いる」と語った。

次に、パネルディスカッションが行われ、
コーディネーターを平和研究所の金子昭所
員（天理大学おやさと研究所教授）、パネリ
ストを平和研究所の森伸生所員（拓殖大学イ
スラーム研究所長）、特別会員の和田恵久
巳氏（立正佼成会総務部長）、平和研究所の
藤本頼生所員（國學院大學教授）が務めた。
この中で、森所員は、イスラームでは共



パネルディスカッションの登壇者たち

感力を育むための慈しみ心、相互理解と信
頼⇨多様性の中から共通点を見つける、相
互理解の促進、善行と寛容の模範があると
語った。そして、正義・慈愛・謙虚さとい
った価値を促進し、これらを次世代へとつ
なぐよう実践していると述べた。

和田氏は、立正佼成会の名前にある「佼」
について詳述。「佼」は人と人の交流を意味
し、その実践として「法座」と「一食を捧
げる運動」を挙げた。「法座」は信仰の仲間

が集まり、仏の教えに基づくものの見方や
行動を互いに学び合い、共感し、心を磨き
合う場所であると紹介した。このことによ
り、「自分を知り、他者を知ることができ
る」と述べた。

また「一食運動」は、世界各地で起きて
いる紛争や災害、貧困などで苦しむ人びと
に思いを寄せ、一食を抜いて空腹感を味わ
い、その抜いた分の金額をさまざまな支援
活動に役立てる、わかちあいの運動である
とし、「私たちは大いなる一つのいのちに生
かされた存在であるという世界観が仏教の
『一乗』の精神で、それが共感力でもある」
と語った。

藤本所員は、神道の人間性の教育につい
て語る中で、感謝、謙虚、正直、扶助と救
済・奉仕、慈悲の精神について紹介した。
そして、「神の道は、毎日の行為が神の御心
に叶っているかどうかを反省し、日々『慎
み』の心を持って精進すること」と述べ、
すべてのものに神が宿っており、平素から
自省しながら日々を送ることが大事である
と語った。

最後に、平和研究所の竹村牧男所長（東
洋大学名誉教授）が閉会あいさつを述べた。
なお、総合司会を平和研究所の齋藤忠夫所
員（東北大学名誉教授）が務めた。

第47回理事会

第47回理事会が3月14日、浄土宗事務庁（京都市）で、オンラインを活用し開催された。理事19人が出席。席上では「日本委員会人事」「タスクフォースメンバー」「第2回東京平和円卓会議」「トルコ・シリア大地震への対応」「AI倫理のための国際会合」について審議し、すべて可決された。トルコ・シリア大地震への対応では、WCRP国際委員会共同議長を務めるエマニエル府主教の要請を受け、トルコ南部のハタイ県における被災者支援を検討していくことが確認された。

タスクフォースで選任された役員は次の通り。

- (1) ストッププー核依存タスクフォース
- 中村憲一郎（佼成学園理事） *責任者
 - 三宅善信（金光教春日丘教会会長）
 - 神谷昌道（ACRPシニアアドバイザー）
 - 黒住昭子（黒住教婦人会会長）
 - 杉野恭一（立正佼成会学術学長）
 - 中西正史（寒川神社権禰宜）
 - 深田章子（円応教智章・海外布教センター所長）
 - 水谷周（日本ムスリム協会理事）

矢萩新一（日本聖公会管区事務所総主事）
 退任…徳増公明（前日本ムスリム協会会長）

退任…石川清哲（妙法慈石会登陵山清川寺代表役員）

(2) 気候危機タスクフォース

田中庸仁（真生会会長） *責任者

高地敬（日本聖公会京都教区主教）

蘭田稔（秩父神社名誉宮司）

赤井悠蔵（カトリック東京大司教区大司教秘書・広報）

國富敬二（立正佼成会徳島教会会長）

田爪希依（立正佼成会調布教会会長）

八坂懂憲（中山身語正宗本部長）

山口弘湛（比叡山延暦寺管理部主事補）

退任…小林恵太（カトリックアトムメントのフランシスコ会修道士）

(3) 和解の教育タスクフォース

山本俊正（元関西学院大学教授） *責任者

庭野光祥（立正佼成会次代会長）

松井ケティ（清泉女子大学教授）

榎本光良（立正佼成会時務部長）

河田尚子（アル・アマーナ代表）

永尾教昭（天理大学前学長）

村上泰教（石鎚山真言宗教学部長）

退任…深田恵子（円応教恵主）

(4) 人身取引防止タスクフォース

宍野史生（扶桑教管長） *責任者

大西英玄（音羽山清水寺成就院住職）

加瀬育代（立正佼成会総務部渉外グループ）

プ）

小林恵太（カトリックアトムメントのフランシスコ会修道士）

小宮山延子（カトリック）

橋本伸作（大本東京本部東京宣教センター長）

弘田しずえ（ベリス・メルセス宣教修道女会）

(5) 災害対応タスクフォース

黒住宗道（黒住教教主） *責任者

力久道臣（善隣教教主）

川上直哉（日本キリスト教団石巻栄光教会主任担任教師）

館野庸子（解脱会青年本部事務局次長）

田中佑佳子（立正佼成会）

三井紳作（神社本廳広報国際課長）

三善健雄（立正佼成会総務部渉外グループ主任）

なお、理事会に先立ち、川中光教浄土宗事務総長導師のもと、講堂で正式参拝が行われた。

トルコ・シリア大地震 支援プロジェクト報告

WCRP日本委員会は、昨年12月に第二期支援として二つの団体に支援を行なった。支援団体の一つであるキッズ・レインボーが実施する、子どもたちへの心理的サポート事業を報告する。

キッズ・レインボーは、トルコ・ガジアンテプ市内で最もシリア難民の比率の高い地区で活動する団体。学校へ通うことのできない多くの子どもたちのために語学（トルコ語）教室や音楽、絵画、映画上映などの場を提供している。この地区に暮らす子どもたちは、避難生活によりストレスを抱え生活するなか、大きな地震にみまわれた。生活環境が悪化するなかで、ますます心理的ケアの必要性は高まっていた。

事業を行うための準備として、プライバシー保護と安全性を確保する観点からビルフロアーを借り受け整備、心理カウンセラーと雇用契約を結んだ。

そして、3月下旬に母親たちへの説明会を開いた。このサービスの紹介、予約の取り方、個人セッションで解決・軽減できる

問題（戦争、地震、移住、社会的孤立などのトラウマ対処、産後うつ、育児ストレス対処など）を説明した。初めに母親への説明会を行ったのは、親の理解を得ることに加え、母親たち自身が抱えていると思われるDVなどの問題へのアプローチも想定していることである。呼びかけに応じ参加した約50人の母親たちは大きな関心を寄せており、今後の活動が期待されている。

アジア諸宗教青年ピースキャン 2023

『一致、平和、慈悲心推進者としてのアジアの青年たち』をテーマに、アジア諸宗教青年ピースキャン2023が2月20日から23日まで、韓国・ソウルのドン・ボスコ韓国サレジオ修道会で、RFPアジア（ACRP）、ACRPソウル平和教育センター（SPEC）、アジア&太平洋諸宗教青年ネットワーク（APIYN）、韓国宗教人平和会議（KCRP）共催のもと開催された。これにアジア11カ国から、約30人の青年が集った。

1日目は、参加者がお互いを知り合うオ



リエンテーションを中心に行動。

2日目は5人の青年による諸宗教の祈りが行われた後、アジア太平洋地域

が直面する課題と、人類共通の課題に対して、他者を受け入れ、一致と平和のために個人で取り組めること、青年が平和のために行動を起こし地球を守ることは何かという視点で、具体的な行動について対話が行われた。

3日目はフィールド・ワークとして、戦没者の慰霊地の訪問および、韓国と北朝鮮の国境付近であるDMZ Zone（非武装地帯）を訪問。近隣諸国との平和構築について韓国の参加者たちと対話し、また資料館の見学を通して平和について考えた。

最終日には各国委員会が行っている青年活動の報告を行い、平和のために協働できることは何かを問い合った。

WCRP国際委員会

新事務総長・副事務総長就任

WCRP国際委員会は、2月12日、WCRP国際新事務総長にフランシス・クーリア・カゲマ博士が就任したことを発表した。また、1月12日にはディーピカ・シン氏が副事務総長に就任した。新事務総長、副事務総長を紹介する。

フランシス・クーリア・カゲマ博士

アフリカ宗教指導者評議会事務総長、ケニア諸宗教評議会事務局長を務める。ケニア諸宗教評議会に参加する前は、中小企業を支援する団体のナシヨナル・コーディネーターを務め、ナイロビ証券取引所でフアイナンシャル・アナリストとして働いた経験を持つ。ケニアの聖ヨハネ救急隊でボ



クーリア新事務総長



シン副事務総長

ランティアアとして16年間勤務し、1998年に訓練・運営担当副長官として退職した。獣医学と外科学の学位を持つ。

ディーピカ・シン氏

シン氏は、国際問題や開発の分野で20年以上の専門的経験を有し、米国国際開発庁(USAID)、国連開発計画(UNDP)、ユニセフ、その他の国際NGOとのコンサルタント業務に携わってきた。米国ニューヨークのペース大学で行政学修士を取得。国際委員会ではプログラム戦略全般とそれに関連する実施とモニターを指揮している。

今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

発飛(ほっと)

慌ただしい年度末を乗り越え、新年度の始まりに少し心が軽くなり、ホッとしています。

WCRPの活動

《4月》

5日 気候危機タスクフォース「WCRPのちの森プロジェクト」森の整備作業(埼玉・所沢)
*16日も実施

20日 気候危機タスクフォース「タケノコ掘りDE森づくり」(埼玉・所沢)

22日 平和研究所第1回所員会議・研究会(東京・普門メディアセンター/オンライン併用)

《5月》

7日 ストップ！核依存タスクフォース第1回会合(オンライン)

16日 総合企画委員会(オンライン)

17日 災害対応タスクフォース第1回会合(オンライン)

20日 平和研究所第2回所員会議・研究会(東京・普門メディアセンター/オンライン併用)

21日 女性部会第1回委員会(オンライン)
掲載内容の無断転載を禁ず。